

江戸時代の香木 一木三銘

大倉基佑 実行委員

神澤貞幹が明和年中頃(1764～1772)、室町より江戸寛政頃までの伝説俗語を収録し、論評を加え筆者自身の見聞雑話をも記した随筆というよりも叢書の性格をもつ「翁草」の中に細川家の香木として巻の六に香木にまつわる面白い話がある。

細川三斎が長崎へ家来を遣わし、珍器を求め興津弥五右衛門と相役を一人添えて差向ける。伽羅の大木が入り、本木と末木の二つがある。

丁度、陸奥守政宗も唐物を調えるため、役人が下つて伽羅の本木と末木を競合い、三斎の役人と互いに値段をつり上げるのである。そして興津は相役と意見が分かれ口論となり、相役を打果たし、終に本木の方を調べて、隈本に帰り切腹を願うが、三斎は「某へ奉公の為に相主を討し事なれば、切腹すべき謂れなし」とて相士の子供を呼び、意趣を遺してはならないと、三斎の前で興津と盃を申付けられ互いに無事に勤める。

その後三斎は逝去し万治・寛文の頃三回忌の砌、弥五右衛門は山城の船岡山の西麓で潔く殉死をするのである。興津が調べた伽羅は類ない名香で、三斎は特に秘蔵をし銘を「初音」と付けその心は、きく度に珍しければ時鳥いつも初音の心地こそすれ。

寛永三年(1626)丙寅九月六日、京都二条の錦城へ主上後水尾帝の行幸があり、この時肥後少将忠利(三斎の嫡子)へかの名香をご所望になり、これを献ずる

と、主上^{えいかん}歡感有て「白菊」と名付け、たぐいありと誰かはいはん末匂ふ秋より後の白菊の花。此の歌の心とぞ。

又、仙台の政宗卿は役人が梢を調べて来たのを残念がるが、流石^{さすが}に名香であるので、常にこれを賞し「柴舟」と銘を付け、世の中の憂きを身につむ柴舟やたかぬさきよりこがれ行くらん。此の歌の心成るべし。

このような所以を知らない人は「白菊・初音・柴舟は、唯同じ香とのみ賞し候」或は「小堀遠州の所持のよし色々異説を云う人有、皆誤りである」としている。細川忠興(1563～1645)は江戸初期に活躍した武将で、本能寺の変に妻(細川ガラシャ)の父明智光秀に誘われるが断り、父藤孝と共に豊臣秀吉に従った。また関が原の役には徳川家康方について、役後、豊前、豊後40万石となり初め中津に後に小倉に移つたが、病を得てからは、隠居し落髪をして三斎宗立と号し、風流の道に精進するのである。

一方、伊達政宗(1567～1636)は戦国時代の武将、輝宗の長子で米沢に居城をかまえ、後に岩出山(宮城県)に移り豊臣秀吉から羽柴氏と称することを許されるが秀吉の死後、徳川家康に接近をはかり娘を家康の子の忠輝の妻とし、関ヶ原の役には東軍に加わり、以後外様大名として仙台城を築き、六十二万石余を領していた。また文化人であり茶を千利休に学んだ

り絵画、和歌、能、香道などにもすぐれていた。

この翁草の話に基づいて、森鷗外(1862～1922)が大正元年(1912)十月一日発行の雑誌「中央公論」に「興津弥五右衛門の遺書」と題して作品を発表している。森鷗外自身も時代の考証をしており、興津が殉死したのは三斎の三回忌とあるがこれは何かの誤りで、三斎没年から推定すると慶安元年(1648)となり、万治、寛文の頃とあるので、森鷗外は万治元年の十三回忌としたとある。

興津が長崎へ往ったのは、初音の香を後水尾天皇が二条行幸の時に献上していることから、寛永三年よりも以前でなければならず、寛永元年五月安南国から香木が渡つたという記録があるのでこれを使い其の時興津が二十代であつたとしても、死ぬ時は六十歳位になっている筈であるとか、細川忠利が熊本城主となるのは寛永九年であるから、これも年代が相違しており熊本を杵築きつきに改めたとしている。

また一木四銘とも言い、初音、柴舟、白菊にさらに天皇に献上されて「蘭」(藤袴)という勅銘香を加えて、その心は、ふじばかまならぬ匂いもなかりけり花はちぐさの色変われども。としているが、これは後世に更に付け加えたもので、一木四銘は世に誤り伝えられ異説が多いのである。このように香銘にまつわる物語や、和歌の心は香銘のついた香木の価値を高めるのである。

ともあれ、伊達政宗は寛永三年(1626)九月、細川忠利より三分割した伽羅の末木、梢の部分を手をとり自ら謡曲の「兼平」の詞から柴舟と命名したのである。

江戸時代にもたらされた一木三銘の伽羅は現在、本木が細川家の白菊、中木が前田家の初音、そして伊達家の柴舟となり室町以前より伝わるらんじゃたい蘭奢待に相当する名香木である。

小生の体験から感想を少し述べると、一木三銘の木所は上々の伽羅で同じ香木であるので香りも同じかということ皆異なるのである。熟成の度合いや、箇所により異なり微妙な香りの相違を生み出している。初音は最高の香りですばらしい。柴舟は気品があり華やかである。白菊は静かで重量感があり長く残る香りである。

大倉基佑 プロフィール

香道研究家

早稲田大学オープンカレッジ講師

元大倉集古館学芸主任

国際香りと文化の会 実行委員

国際香りと文化の会